

第一問

(六)	知	、	識	活	價	知	(五)	(四)	(三)	(二)	(一)
a	性	他	を	動	け	性					他人の話をかたつもりにならず、それに耳を傾け、その内容を実感と を納得できたり、重みを、自らの知識の枠組みに接続しままに反省できる人。
陳腐	的	の	誇	を	、	と					自説を根柢とする豊富な知識を盾にして他人に一方的に語る人は、 自らの思考枠をすべて妥当な絶対性を備えてひと睨みで見下す。
b	人	示	活	自	は	、					自分の思考が相手に無視されることは、他者と対話し合いながら知 き達成していく。人間の生のあり方が否定されると同じこと。
怠惰	々	々	性	ら	、	個					思ひもよぬ発想を人々にもたらし、人々の活潑な創造活動を創出する力。 集団内でのやりとりを通じた创意形成に至る過程で、個人だけでは
c	創	的	考	考	人	が					思ひもよぬ発想を人々にもたらし、人々の活潑な創造活動を創出する力。 思ひもよぬ発想を人々にもたらし、人々の活潑な創造活動を創出する力。
頻繁	し	造	な	の	を	互					
は	カ	考	で	刷	い	い					
な	を	え	み	新	に	異					
い	失	を	る	し	し	異					
、	わ	主	以	つ	て	は					
と	せ	張	上	つ	る	意					
、	る	す	、	集	、	見					
う	人	る	自	固	に	見					
ニ	物	た	己	の	に	見					
と	か	け	の	知	的	見					
。	、	て	知	的	を	見					

第一問

(五)	(四)	(三)	(二)	(一)
尼上が火葬に付され、後に残された姫君は今度悲しげだろうと云ふ。	姫君も今すぐ尼上の後を追つて死にたいくと思つていろと云ふこと。	尼上がいわしる時はたまたま私がおではを離れることがある。どうか自分の死後も必ず乳母に姫君を大切に世話をもらひたうと。	日をとめることが見えなからないので	悲しいというのも、月並みな言い方だ

第三問

(四)		(三)	(二)	(一)
f	c	a		
			私は海棠の花にさわることさえためらわってしまうだらう。	ひとに氣のない谷あいの地。
			海棠の紅色の花を、酒を飲んで頬が赤くなつた美女にたとえている。	何もすることがない。
			大きな渡り鳥が海棠の種を四川から黄州まで運んだといふ。遠方から運ばれた海棠に、黄州に左遷された方が身の孤独を感してとり、作者が共感を覚えたから。	

第四問

(一)	(二)	(三)	(四)
天候の崩れを、日常感覚の中で突然感じ、 感覚 が、あって、非日常的な恩寵 が感じられるので、自己を束縛する予報をさうした契機を奪つもだから。 海の青は重い現実を抱え、すぐには消える幻の色であり、空の青も不穏な変化 の可能性を秘め、他の色から孤立した、人の手の届かない幻の色だと云ふところ。 表面的に平穡に見える日常は、そつた状態を維持するために暴発的なやさぐれ を更新する、外からは見えない心の動きによって保たれていくこと。 青い空の崩れと回復に呼応する、絶えざる自己刷新への確信や期待が、降下して いく風船の赤い目を奪われる」と、もうくも失われてしまつたこと。	海の青は重い現実を抱え、すぐには消える幻の色であり、空の青も不穏な変化 の可能性を秘め、他の色から孤立した、人の手の届かない幻の色だと云ふところ。 表面的に平穡に見える日常は、そつた状態を維持するために暴発的なやさぐれ を更新する、外からは見えない心の動きによって保たれていくこと。 青い空の崩れと回復に呼応する、絶えざる自己刷新への確信や期待が、降下して いく風船の赤い目を奪われる」と、もうくも失われてしまつたこと。	海の青は重い現実を抱え、すぐには消える幻の色であり、空の青も不穏な変化 の可能性を秘め、他の色から孤立した、人の手の届かない幻の色だと云ふところ。 表面的に平穡に見える日常は、そつた状態を維持するために暴発的なやさぐれ を更新する、外からは見えない心の動きによって保たれていくこと。 青い空の崩れと回復に呼応する、絶えざる自己刷新への確信や期待が、降下して いく風船の赤い目を奪われる」と、もうくも失われてしまつたこと。	海の青は重い現実を抱え、すぐには消える幻の色であり、空の青も不穏な変化 の可能性を秘め、他の色から孤立した、人の手の届かない幻の色だと云ふところ。 表面的に平穡に見える日常は、そつた状態を維持するために暴発的なやさぐれ を更新する、外からは見えない心の動きによって保たれていくこと。 青い空の崩れと回復に呼応する、絶えざる自己刷新への確信や期待が、降下して いく風船の赤い目を奪われる」と、もうくも失われてしまつたこと。